

後期高齢者の死亡前入院医療費の調査・分析

2007年7月11日

社団法人 日本医師会

日医総研「後期高齢者の死亡前入院医療費の調査・分析」より

(詳しくは、日医総研ワーキングペーパーNo.144参照。<http://www.jmari.med.or.jp/>)

目的

終末期の医療費に関して、厚生労働省は、いまだ1990年、1991年の社会医療診療行為別調査をもとに行われた研究を使用しており、最近の終末期医療費に関しては明確なデータが示されていない。そのため、現状の終末期医療費の実態を把握する目的で調査・分析を行った。

方法

死亡日から遡って30日分の入院レセプトを分析(たとえば入院期間が30日以上の場合は30日分。入院期間が7日の場合は7日分)。

対象

急性期、慢性期の偏りが出ないよう3病院を抽出。

2006年度中に75歳以上で死亡した入院患者403人。

(後期高齢者は、患者本人・家族・医療提供者が、終末期医療のあり方、特に治療の縮小等の判断に迷う局面がより多いと推察されるため。)

財政制度等審議会 財政制度分科会 財政構造部会(2007年5月16日)
配布資料「社会保障(2)(医療制度の現状と課題)」(財務省主計局)30頁より

1年間の死亡者について死亡前1ヶ月間にかかった医療費を年間の終末期医療費とした場合、

1年間の死亡者数(平成14年) 98万人
うち、医療機関での死亡者数 80万人…①
死亡前1ヶ月の平均医療費 112万円…②

○1年間にかかる終末期医療費 ①×②=約9,000億円

資料出所:医療経済研究機構「終末期におけるケアに係わる制度及び政策に関する研究」(平成12年3月)等を基に、厚生労働省保険局調査課において推計

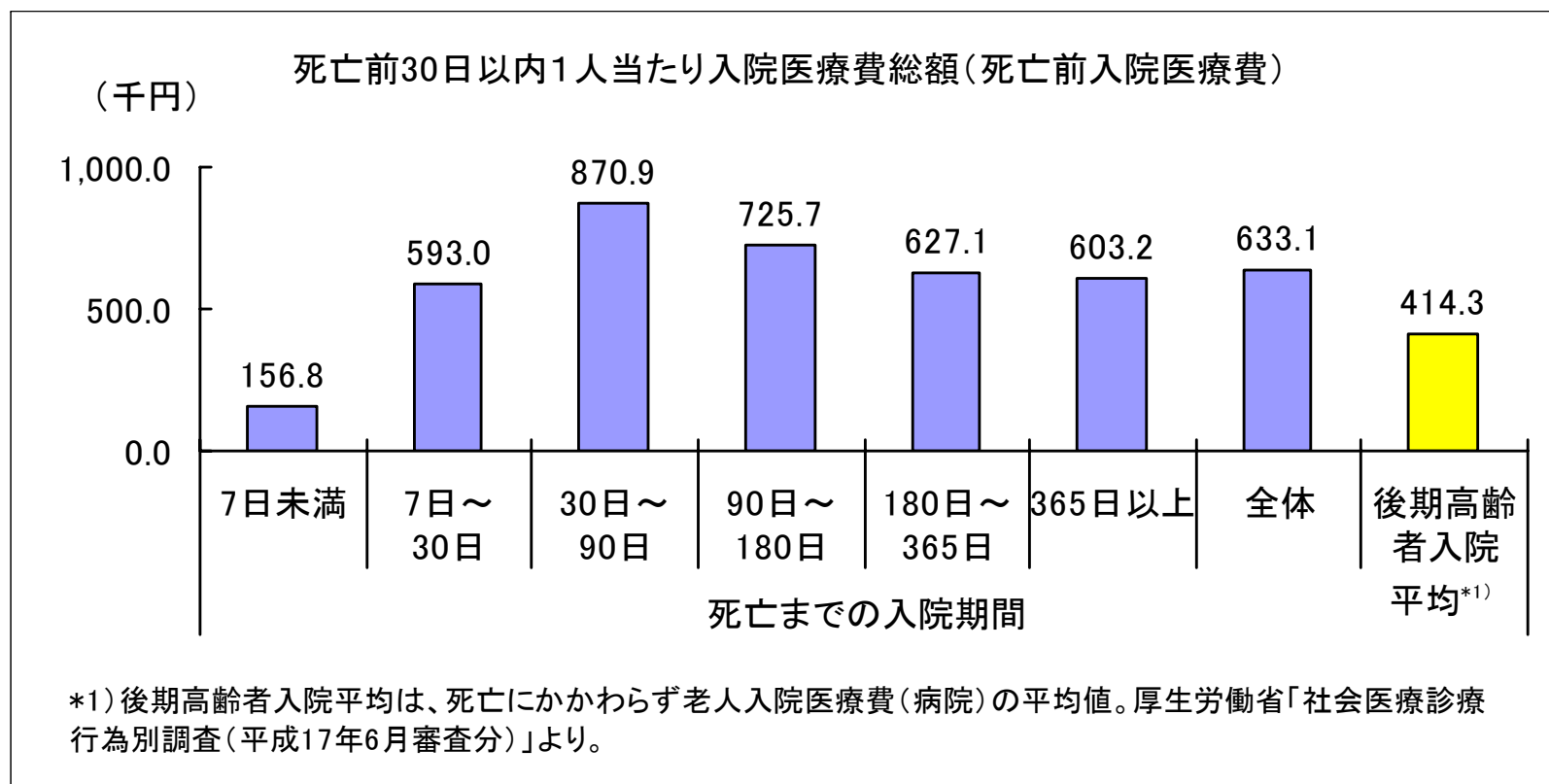
医療経済研究機構が、1993年の研究をもとにその後の医療費の伸び率をかけて医療費を調整し、1998年の患者数等を用いて推計。

国立公衆衛生院が、1990年と1991年の社会医療診療行為別調査(死亡月データ:710件)をもとに行った研究。

終末期の入院医療費総額－後期高齢者のみ－

急性期のまま死亡するケースでは、入院期間が短い(入院期間7日未満の場合、最大で7日)ので、終末期に1人が費やす医療費総額は156.8千円に止まる。

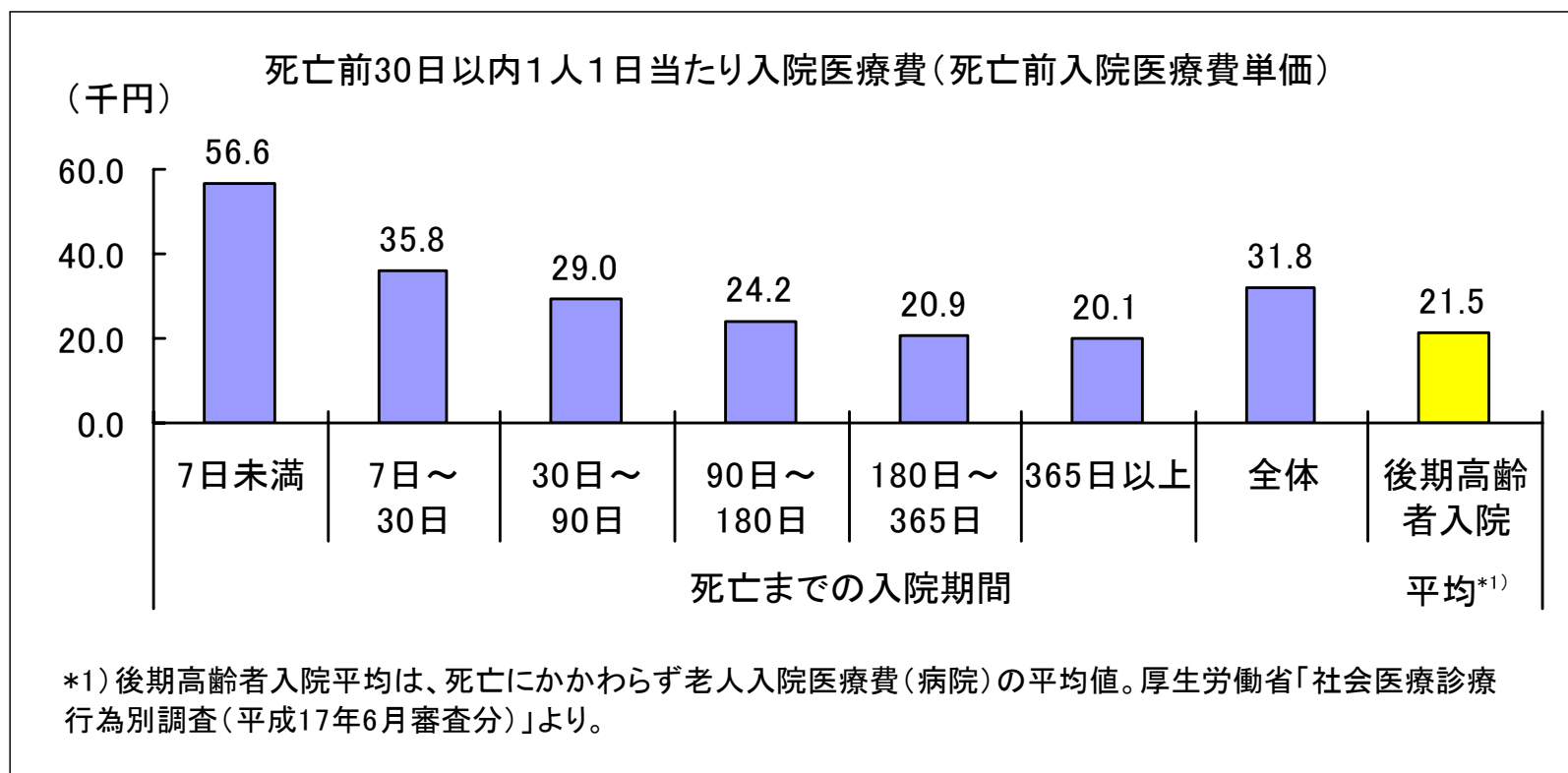
他方、180日以上グループでは、1人当たり医療費総額が一定の値に収斂されており、診療行為がやや変化していることが示唆された(入院180日以上では入院基本料が減算される影響もある)。



終末期の1日当たり入院単価—後期高齢者のみ—

終末期の1日当たり入院医療費単価は、平均31.8千円である。後期高齢者の入院医療費単価(死亡以外の退院も含む)の平均21.5千円に比べて1.48倍であるが、突出して高いとは断定しにくい。

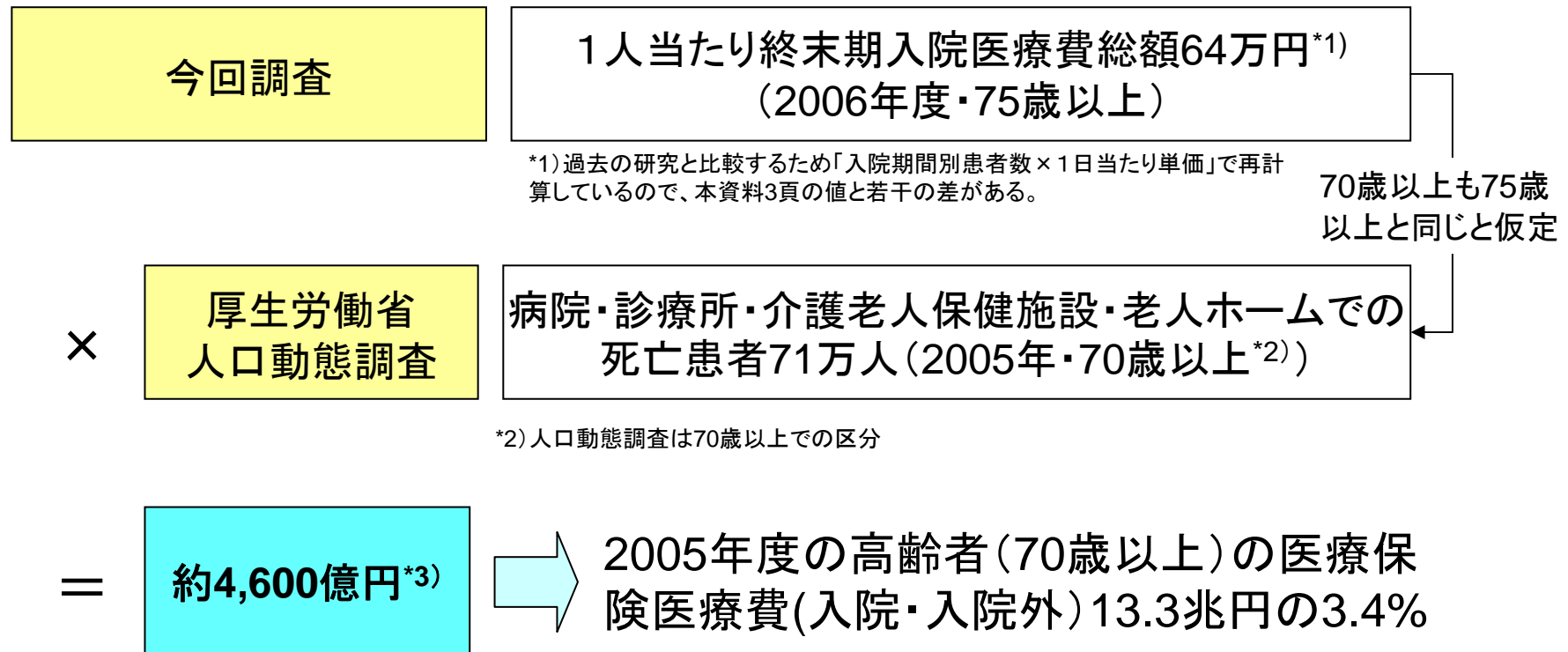
さらに死亡前の入院期間が180日を超えて死亡にいたったケースでは、終末期1日当たり単価は、入院医療費平均の21.5千円を下回っていた。



参考

高齢者の医療費全体に占める終末期の入院医療費の試算

※各調査の実施年、対象年齢区分が異なるため、参考値として示す。



*3)それぞれ四捨五入して示しているため計算結果と合わない

まとめ

1. 終末期の入院医療費は高いと言われることもあるが…

急性期であらゆる手を尽くして死亡にいたった場合でも、医療費総額としては影響が少なく(死亡までの入院期間が短いため)、また延命できた場合にはその後の1日当たり単価は頭打ちになる。

仮に医療費抑制のために終末期医療を限定すべきという意見があったとしても、医療費の観点から治療を縮小してもよいという理由は見受けられなかった。

2. 最新のデータでの精査が必要

今回の日医総研調査は、実態を粗く把握するため試行的に行ったものである。

厚生労働省は「社会医療診療行為別調査」を実施しており、データを保有しているので、最近の実態を示すべきである。